史上最大の虚構

その本当の被害者は誰か

～チェルノブイリの影響についての報道～

日本原子力産業会議発行

月刊英文専門誌「ATOMS IN JAPAN」

'91年6月号「スコープ」

チェルノブイリ事故の人体影響についての報道は、今日まで混乱し、かつ煽情的なものだった。ソ連の医学専門家が事故直後の31名の死者（28名が放射線によるもの）以外には、「事故による直接放射線の被害は見つかっていない。」といくら説明しても、「奇形動物がでた」、「小児の白血病続出」、「甲状腺障害も増加」といった現地からの報道の洪水にかき消されてしまってきた。それは、ペレストロイカやグラスノスチによりおきた、従来のソ連共産党の独裁に対する大きな反撥、その独裁に協力してきた学者連に対する根深い不信、ウクライナ・白ロシア共和国の連邦政府への抵抗などで、一層拡大された現地の混乱や不満に起因するもので、それを取材するソ連内外のジャーナリストなどの、ときには特別な意図により、またときには放射線影響に対する知識不足により、センセーショナルな記事として世界を駆けめぐってきた。

ソ連政府自身も諸外国へ「チェルノブイリ救済」を求めはじめ、「チェルノブイリの被害者を救おう」という一見人道的な呼びかけも各国でつづいた。国際赤十字社でさえ、チェルノブイリの被害者は（300人などでなく）300万人に上るだろうと述べるほどであった。

業を煮やしたソ連政府は1989年10月 I A E A に対して正式に「事故後ソ連政府が地域住民に対してとった、又とろうとしている対策は正しいものであったかどうか」を客観的、科学的に評価してほしいと正式に要請した。I A E A は WHO、F A O、U N S C E A R（国連放射線影響科学委員会）などの7つの国連専門機関ならびに10カ国の専門家20名からなる国際諮問委員会を組織してこれに当たった。その委員長は広島、長崎の影響を戦後40年にわたり日米共同で調査しつづけてきた広島の「放射線影響研究所」の重松逸造理事長がつとめた。1年半に及ぶ精力的な調査評価作業を行いその結果が去る5月、ウィーンで発表された。それは、現地調査やソ連政府関係者や現地住民からの詳細な聴取にとどまらず、10,000人に及ぶ住民の Whole Body Counter による体内放射能測定や6,000人の血液検査など本格的なチェックにまで及んだもので、報告書は厚さ8センチの膨大なものである。その結果は、本誌の読者なら先刻御承知の通りでくわしく述べる必要はないだろう。

環境汚染：ソ連のCs汚染地図は正確。I A E A 調査班の土壌分析ではPuはソ連データとほぼ同じだが、Srはむしろ低かった。飲料水と食品の放射能レベルは多くは検出限界以下だった。

被曝線量：ソ連側の線量推定方法は科学的に正しかったが、I A E A 調査班の独自推定値はソ連の推定値より低かった。

健康影響：I A E A 調査班による汚染地域と非汚染地域の住民健康調査では、放射線被曝に直接起因すると思われる健康障害は認められず、むしろストレスや不安といった心理的悪影響が著しかった。調査班の推定被曝線量を元に現在国際的に認められている放射線リスクの値によって試算してみても、がんや遺伝的影響が増加する可能性はほとんどない。

防護対策：ソ連当局の対応は一般的に適切であったといえるが、疎開や食品の制限はもっと小規模でよかった。汚染地域住民の不安を考えると、今の方針をゆるめるのは逆効果となるだろうが、より厳しい制限を設けることは、避けるべきである。

一言でいえば「ソ連政府のとってきた住民を放射線被害から守るためにとった措置、ならびにその基礎となったデータ等放射線の測定結果は、すべて慎重すぎる位で全く妥当なものであり、また放射線被曝に直接起因する住民の健康障害はすくなくとも今までのところ皆無である。」というに盡きる。この国際調査結果に対しては、すでに両共和国筋から一部批判がでており、また日本などの一部の新聞には「調査の姿勢に問題」という訳のわからぬ批評はあるものの、科学的な批判は全く出ていない。

一体これまでのセンセーショナルな報道と、この科学的な調査結果とのあいだの大きなこの格差は何を意味するのだろうか。正に日本の格言「大山鳴動鼠一匹」のとおりである。

私はここで日本でおきた事実の2~3を披露することで、自ら明かな結論を示すことにしたい。

まず、場面はヒロシマ。日本の大新聞に「チェルノブイリの被害者、×名（多くは小児）、治療のため来日」という大きな記事が、気の毒な“被害者”と説明付きの写真とともに、この1年間に少なくとも10回は掲載された。この招聘した組織は、新聞社や「チェルノブイリを救う会」といった組織であり、これらの「被害者」は広島放射線影響研究所（ここは放射線障害の有無とその程度を検査する所で原則として“治療”はしない。）を訪れ、精密な検査を受ける。私はその被害者のことが心配で、研究所にその結果を何度か尋ねた。答はつねに「栄養不良などをのぞけば、健康で放射能も白でした」ということであった。しかしながら、不思議なことに「これらの子供は何ともなかった」といった結果の報告記事は小さなもの一つを除いてどの新聞にもものったことがない。

一体この人たちはどういう目的でこれらの“被害者”を招聘しているのだろうか。

もう一つの例、ヒロシマには現地或いはヨーロッパのジャーナリストと称する人々が何度もやってきて、「ヒロシマで被曝2世に奇形がないというのはウソでしょう」とたずねまわった。40年前原爆直後にはヒロシマでもそういった「被害者の子供は奇形かも」といっ

た噂が飛び交い、女性被爆者がお嫁に行けないかもしれないと悲観して自殺した例もあった。しかしそういった心配は、その後20-30年に及ぶ、70,000人もの被爆2世の調査で全くの杞憂とわかり、そういった心配も困難も皆無になった。にもかかわらず、ソ連・東欧からきた前記の人々は「お金をもらって黙らされているのでは・・・」等々しつこくききまわり、「事実として皆無」と答を繰り返すと、(何の目的で来日したのか想像はつくが、)その目的をあきらめて帰っていく。しかし「帰国後、そのことを正しく報道してくれたことは一度もない」とヒロシマの人々はなげいている。

更にもう一つの例。今年の4月26日。チェルノブイリ事故5周年の朝、日本最大の公共放送は、朝のトップ・ニュースとして次のようにのべた。それはチェルノブイリ後5年たって発病者があとをたたないと伝えられると述べたあと、「事故の後始末の作業に従事した人々60万人のうち、この5年間に7,000人が死亡したのです」としめくくった。

この「・・・」内を読みかえしてみるとウソはほとんどないが、肝心の説明が意図的に抜けている。一般に60万人の集団があれば、5年間に7,000人という死亡率はむしろ若い人々の集団としてはむしろ低い方であり、何もこの7,000人がチェルノブイリ事故の影響で死亡したわけではない。

このことは、この集団(チェルノブイリ同盟)の代表者自身がそう説明しているのだが、事故の恐怖をあおるためにワザとこの放送は省略したとしか考えようがない。

チェルノブイリ事故自体は平和利用として全くとんでもない出来事で、ソ連のペレストロイカ以前の体制の悪さが集中的に噴出したものといえよう。私はこの事故を大したことはないとか、弁護したりするつもりは毛頭ないし、それを「他山の石」とし、また原子力関係者はさらに高い安全性の向上に真摯な努力をつづけている。

ところで、この情報の混乱の真の被害者は誰だろうか。それはチェルノブイリ近傍の人々自身ではなかろうか。あれだけの情報の混乱によって(不必要な)不安におとしいられた人、精神的なストレスのため病気になった人もいと伝えられるし、放射能のこわさにおびえて食事をとらなかつたため、病気になった人も多いと伝えられている。チェルノブイリの子供10,000人のために「楽園をつくる」と慈善者ぶったキャンペーンを張る新聞社もある。頭から10,000人の子供たちが放射線で病気や癌になるときめつけるような、このような“慈善”的行為が子供たちの心をどれだけ傷つけるものか、何故判らないのだろうか。 ヒロシマを知る日本人の一人として、私はチェルノブイリの人々の心中を察して、心が痛む。原子力発電に反対するのは各人の自由だし、ソ連邦のペレストロイカを推進することも大切だが、そのためにチェルノブイリの周辺の人々を利用し、その心をもてあそぶこと、それだけはやめてほしい。

(了)